



明治維新考

カットは中齋・大塩平八郎の著わした洗心洞割記二巻

吉田吉之助

(かつ吉主人)

「あなたは、明治百年について、何かお考えになったことがありますか」

「いや、別に……」

「では、明治百年間のいちばん印象の強いことは？」

「さあね、戦争かしら……」

これはテレビ街頭インタビューの、若い女性の返事である。明治生まれは、我国全人口の僅か五パーセントだから、日露戦争を知っている本ものの明治人は暁の星の数ほどに少なくなってしまう。右のような答は、いまの日本人の過半を占める「明治感覚」と見てさしつかえないだろう。

「君は、明治維新について考えたことがあるかね」

「ええ」

「それを、どんなふう考えている？」

「さて、それは……徳川三百年の積悪の崩壊。士農工商という階級の重圧を打破するために、被圧迫の下層大衆が立ち上って、特権階級たる幕府と大名を打倒して、封建制を抹殺し、自由主義に基づき資本主義制度を樹立した社会革命。」

いまの若い男性インテリはたいそう答える。わたしが質問した限りでは、右のマルクス流の革命理論のほかには、特にはっきりした答は得られなかった。前の女性は無関心、あとの方は馬鹿の一つ覚え。私はこれらの人達と、この稿で述べる以下の私見について話し合うことにしている。



「二・二六事件襲撃要図印刷の図」。立っているのが往時の吉田上等兵。(週刊文春昭和四十四年新春特大号より転載。松本清張氏「昭和史発掘」の挿画・風間完氏筆)

いったい、明治はまだ続いているのだろうか、ということについては、人によって見方がちがう。明治は昭和二十年の敗戦の時に終わった、と見る人もあり、いや、大正の大震災でつぶれたという人もいる。そうでない、いままも続いている、という人もいる。私は、昭和十一年の二・二六事件(昭和維新)の雪と共に消え去った、と見る。

それでは、明治維新の胎動は、いつの頃から始まったのだろうか。これにもいろいろの見方がある。天保八年(一八三八)の大塩の乱。嘉永六年(一八五三)ペリリの来航。安政五年(一八五八)井伊大老による米、蘭、英、露、仏との通商条約締結。また、同じ年の安政の大獄。万延元年(一八六〇)の井伊大老暗殺事件、その他さまざまだが、私は、これらの事件を醸成し、または、方向づけして、明治維新の達成に強い指導力を与えたものは水戸藩の大日本史であつたらうと思ふ。大日本史は、日本人が、自分の歴史を、自分の史眼によつて書き上げたものである。これは、頼山陽の日本外史を伴ふことによつて、日本人の歴史観を確立したものである。

凡そ世界の民族のうちで、自分の眼で見た自分の歴史を、自分の言葉で書きあげた民族はそう多くない。そういう史書(広い意味での)を持つ民族は、必ず、ひとかどの料理を持っている。料理というものを奥にたどつて行くと、漬物にいたる。それを搾ると、麦漬からビールやウイスキー、葡萄漬からブドウ酒が出るように、米漬から日本酒が出てくる。

この酒がしたたつて民族の詩となり、詩が流れて史となる。世界の民族で特有のうまい酒をもっているものは、十指にとどまるであろう。スコッチウイスキーの国・英国(アングロサクソン)は、シェークスピア、アダムスミス、ウエルズをもち、ビールの独逸(ゲルマン)は、ゲーテ、ベートーベン、ヘーゲル、マルクス、ビスマルクをもち、ブドウ酒の

国・フランス(ラテン)は、ケネー、ナポレオン、ミレー、セザンヌ、ジャンヌ・ダルクをもつ。白乾児、紹興、清酒(詩経、谷風信南山)など、あまた充棟(倉庫にあふれる)の酒をもつ中国漢族は、四書五経から始まって孫呉空を含む汗牛(スプリングが折れるほど)の書を持つ。

我が日本民族は、右手に、古事記、万葉、書紀、源氏物語、大日本史、群書類従、兼好、芭蕉、山陽、止軒、康成、弁慶などをもち、左の手に、日本酒を持って、ヤツテいる。

歴史には酒の香がする。仁和寺の若法師には伏見の酒の香が、若山牧水は熱つ爛の、小諸時代の藤村には濁り酒の香が漂う。横山大観の生々流転には、灘の生一本が流れている。さて、酒顛童子は、どんな酒に酔っていたらうか。

ところで、徳川光圀(義公、黄門)が、大日本史の編さんに着手したのは明暦三年(一六五七)である。明治に至る二百余年前、正確には、マイナス明治二百十一年である。この史書は、明治維新の底流を形成するにあずかつて力あるものであつた。明暦は、徳川幕府創立後間もない時期であつて四代將軍家綱の時代である。以来二百五十年、塙保巳一など全国歴代の学識の結集をもつて、水戸十五代を経て、明治三十九年に至つて完結を見た。黄門の漫遊は、全国に亘つて歴史資料を蒐集するために行われたものだということである。幕末時代の水戸の当主・徳川斉昭(慶喜の父、烈公)は、酒の肴には、近江黄牛の味噌漬がよいと云つて、彦根の井伊



川端康成氏の書。山水楼・宮田武義氏蔵

家から、これを取りよせることを常としていた。或る日、江戸の殿中で、時の大老・井伊直弼に会い、「(こ)暫く、貴国名産の牛肉にお目にかからぬが、送って下さらぬか」と、云うと、直弼は「拙者、僧籍に身を置く者、殺生は嫌いでござる」と、ニべもなく断つた。烈公は「イイ気になりおつてモウ勘忍ならん」と、烈火の如く怒った、ということである。

坊主に向かつて、おかに殺生を依頼したのは、烈公の不覚としても、彦根の城中には、一旦緩急の場合の兵糧として、常に貯蔵牛肉が保存してあったのだから、少しぐらいな分け前は、出してもよさそうなものだったが、直弼の腹の虫が承知しなかった。それは、幕府の危急を一身に担う直弼にしてみれば、二世紀に亘って、幕府の存立をゆたぶるような筋書の、大日本史を書き続けている水戸が気にくわないのである。だから直弼は、十四代將軍に水戸系の慶喜を迎えることを極度に嫌って、紀伊家から家茂を迎えたのである。

世の中は皮肉である。水戸は御三家の一つで、將軍家の鼎足の一つである。幕府創設者・家康の孫にあたる副將軍光圀が、好きではじめた史実の研究が実って、やがてそれが倒幕の震源となり、この波乱万丈の中に、慶喜は十五代將軍として登場し、そして幕府劇の最後の幕を閉ぢる役を受けもつとは、天命はいたずらである、といわざるを得ない。

幕末の水戸には、藤田東湖がいた。彼は文天祥に倣って「正氣の歌」をつくり、尊王攘夷の士風を鼓舞した。彼が安政の

つらだましいには、幕府も一目おいていた。

九州肥前佐賀の鍋島藩も、酒については、おとなりの黒田藩に負けまいと、天下に名ある鍋島の名器に酒肴をつらねて、その道に精進した。この藩には「葉隠論語」がある。

「武士道とは死ぬことと見つけたり」という名句に感激して、藩士は武士の道に励んだ。江藤新平、副島種臣、大隈重信などがいた。

徳川の封建が続くかぎり、お国安泰の特権大名の四藩が、まさか倒幕の矢表に立とうとは、お釈迦さんでも、マルクスでも御存知なかったであろう。

マルクスの革命理論によれば、「資本主義の発達によって、金融資本の独占支配が極限に達する。そうすると、資本主義はその内部の矛盾から、階級の対立が激化して革命が勃発する」という。唯物史観は、この唯物弁証法の方式によって人類の歴史の解明を試みようとする。

幕府八百万石の財政は、幕末の内憂外患の出費によって、たしかにバランスを失っていた。数々の奢侈禁止令が出されて、インフレの防止が企てられる一方、貨幣の改鑄が屢々行われ、悪貨の横行がはげしかったことは事実である。が、そういう経済現象のみが、直接に大げさに、大衆を圧迫刺激し、これを動員して、革命に進軍させたとする見方で、明治維新を割り切るのには、盲人撫象のそしりをまぬがれないものと思う。

これまでの人類の歴史の中には、マルクスの革命理論を当

地震で不慮の死をとげると、その遺髪をついだ佐野竹之助などが、やがて江戸へ潜入し、「ニックキ、主君の仇」とばかり、井伊大老を襲撃した。万延元年三月の桜田の変である。

倒幕の主力をなした薩長土肥は、ことごとく夙に世界の息吹に接した雄藩である。吹けばとぶよな陣笠大名ではない。

西南の薩摩には、鎌倉時代から腰を据えている島津がいた。ここは古くから外国との接触がしげく、まず天主教が伝来し、種子島の鉄砲、甘薯、馬鈴薯、ガラス、黒豚などの取り入れ口として殖産大いになり、あたかも独立国の観をなしていた。幕末にはここに、西郷隆盛、大久保利通、桐野利秋、黒田清隆、松方正義などがいて、黒薩摩と称ぶ酒麴に、芋焼酎を仕込んで、薩摩焼のグイ呑みでやつつけていた。幕府もその威勢に眉をひそめ、響のマークに怖れをなしていた。

長門藩と称ばれる山口萩の毛利藩には、吉田松陰が松下村塾をもっていた。これも本州の西端に位置し、元就以来、山陰、山陽十箇国を領有し、夙に外国との交渉もはげしく、充実した大藩であった。ここの人達・高杉晋作、木戸孝允、山県有朋、伊藤博文、井上馨などは、馬関の雲丹で、萩焼の猪口を傾けていた。

土佐高知の山内藩には、坂本龍馬、後藤象次郎、板垣退助などがいて、鯉のたたきで酒盃を交わしていた。山内家は藩祖・一豊以来、女房と馬を吟味することにかけては、天下にその名を謳われていた。黒潮で鍛え上げた土佐犬のような、

てはめた方が、わかりやすい騒動もある。たとえば、フランス革命、ロシア革命、大正七年の米騒動、および敗戦後の米よこせ運動などはそれである。無銭飲食の大衆行動ともいえるこれらの暴動には、「物ほし気」な精神が充滿している。あたかも蝗の大群が大地を食い荒らす暴情を露呈し、騒ぎの中に少しも情緒がない。或る時代のピカソの絵は、その非情ムードをよく描き表わしている。

ムードとは歴史をふまえない異質の混在であり、情緒とは歴史の中の伝統の纏綿である。

十九世紀半の英国の経済社会を分析したものが、マルクスの資本論だといわれる。産業革命直後の英国資本主義の創草期には、「資本家は、機械と労働によって生産した商品を、貨幣に換える。その時に労働を搾取し、これを資本に繰り入れて、再生産を拡大して行く」という社会相が濃厚であったであろう。その当時の観察に基礎づけられた革命理論を、君子国の明治維新に当てはめようとするのは、鶏刀をもって牛肉を割くそしりをまぬがれないものである。

近代の革命は、マルクスの革命の筋書に反して、資本主義国には発生せず、低開発の農業国にのみ見られるという現象は、マルクス主義の適応性の限界を示すことにもなるが、この十九世紀の託宣が百年もの間、幽霊のように社会に出没して、人の話題に上ってやまないのは、人智の渋滞が、悪夢に温床を捧げていることにもなる。



渡辺崋山描く佐藤一斎像

いまの日本に流行する角材斗争は、玉手箱を開けた浦島太郎の「タコ踊り」を想わせて、あわれであるが、そんな芝居が多少とも、見ごたえある人の世の味気なさは、さらにあわれである。こういう、前時代の演劇が、日夜続けられている世界に、第二次産業革命の原子の火が点された。マルクスの労働価値説は、やがてエネルギー価値説に置き換えられようとしている。その一方、むかしフランス革命によって、ブルジョワがかちとつたとする、自由主義デモクラシーは、世界の隅々にまで無差別平等の流行をもたらし、多数決原理の法則は、いまや、人の叡智も情感をも左右しようとするところに来て、高まって来ている。この前史的な多数決原理を、同

わずらう勿れ。此れみな異邦人の求むる者なり。なんちの天の父は、凡て此等のものの必需（きつてふた）ことを知りたまえり。なんちまず神の国と共に其の義とを求めよ。然らば此等のものは皆なんちらに加えらるべし。是故に明日の事を憂慮（うれ）うなかれ、明日は明日の事を思いわずらえ。一日の苦労は一日にて足れり。」（馬太伝第六章より、「明治三十二年、大日本聖書館印行の聖書から採り、仮名ずかいだけをおした」）

キリスト教が投影したと考えられる西欧社会と、その驥尾（きび）に附して来たといわれる、今日の日本の社会の有りさま―それを、人称んで昭和元祿という―が、これが、ソロモンの栄華の極みの時の様相を呈していないか、どうか。また、その人ごみの中で、「お天とうさまと米のめしは、いつでも、ついてまわる」という俚諺を忘れた人達が、極めて無意味な、異邦人的な物の争奪を、飽くことなく、継続してはいないか。私は、われわれが千年の歳月に宿を借らんと欲すれば、須らく一輪の百合花に思いを留むべきであらう、と思ふのである。

詩経大雅に「文王、上に在り、於、天に昭（あき）なり。周、旧邦なりと雖も、その命、維（たも）れ新」という言葉が見える。これが維新の語の発祥であろう。維新は「維（たも）れ新」、明治の当初には一般に、「御一新」といった。それは、春光が万物を育くむのに似て、民族に希望が溢れ、光が満ちていることである。絢爛（けんらん）の中の多彩な錯雑は、維新とはいえない。維新は、人間の、ひと筋の道の創造である。それは猷（ち）的奪い合い、乃

じ次元の多数決で置き換えて、世界を改造しようとするマルクス、レーニン主義は、人類の叡智から出発したものでなく、間に合わせのポロつづくりである。

マルクスの祖述者・川上肇は、かつて、「千里の目を窮めんと欲して、更に一層の楼に上る」という名句を引用したことがある（経済学大綱）。私はいま、この唐詩選の句に想いを致そうとすると、キリストの句が頭に浮び、千里の風景が眼前に展開するのである。

「人は二人の主（しゅ）に事うること能わず。そは、これを悪み、かれを愛（いと）しみ、此を親しみ、彼を疎（と）むべければ也。なんちら神と財（たから）に兼ね事うること能わず。此の故に我なんちらに告げん。生命の為に何を食い、何を飲み、また身の為に何を衣（き）んと憂慮（うれ）こと勿れ。生命は糧（か）よりも優り、身体は衣（き）よりも優れる者ならず乎。なんちら天空の鳥を見よ、稼（い）ることなく、穡（こ）ことを為（な）さず、倉（ぐら）に蓄（たくわ）うることなし。然るになんちらの天の父は、之を養い給えり。なんじ之よりも大いに勝れる者ならず乎。なんちのうち、誰か能くおもひ煩（わづ）いて、其の生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣（き）のことを思いわずらうや。野の百合花は如何にして長（なが）つかを思え。勞（つと）めず紡（む）がざる也。われ、なんちに告げん。ソロモンの栄華の極みの時だにも、装（ま）この花の一（ひと）にも及ばざりき。神は、今日野にありて明日炉（いろ）に投げ入らるる草をも如此（ごと）くには、せ給えば、況（いま）てなんちおや。嗚呼（ああ）信仰（しん）仰（う）うすぎ者よ、然（しか）ば何を食い何を飲み何を衣（き）んとて思い

至、殺し合いの末の、ボスの交代でもない。
人の世の変貌は、氷河の移動でも、ノアの洪水でも起り得る。また、物ほし気な、大衆の蜂起に因るものもあれば、個人の知性に基ずくこともある。

中斎・大塩平八郎が大坂で乱を起したのは、マイナス明治三十年である。この乱がきっかけとなって、以後各地で叛亂の継起を見るようになった。中斎は蹶起の四年前に「洗心洞（せんしんどう）割記」（全二巻）を著わして、これを頼山陽と佐藤一斎に贈っている。一斎はその礼をかねて感想文を中斎に送り、左のように述べている。

「……いま又、新刻全部御恵み下され、反覆拝覽致し候ところ、数条御実得の事ども、人をして感奮興起、欣躍（きんえつ）にたえず、拙老など及ぶべきところに非ずと存じ奉り候。就中、大虚の説御自得、敬服致し候。拙もかねがね靈光の体（たい）、すなわち大虚と心得候ところ、自己にて大虚と覚え、其の実意、必らず固より私の私を免れず、認賊（にんぞく）為子の様と相成り、認め難き事と存じ候。貴君精々この所に御著力成られ候えば、御得力ここに之れある可しと存じ候。尚も実際に御工夫、着せられかしと祈り入り候事に御座候……」

大坂の天満与力だった大塩平八郎は、与力の職を子にゆずり、洗心洞で専ら陽明学を講じていた。彼は、天保の饑饉に際して、貧民の救済を町奉行に請うたが聞かれなかった。そこで自己の蔵書などを売り払って、飢民の救済につとめたが